

例会報告：2012年11月6日（雨）第1773回通常例会

会場：小田原卸センター内会議室
時間：12:30～13:30

❖ 会長挨拶

「トリカブト（鳥兜）」

小嶋 章司 会長

この時期は秋の山野草が大変きれいです。青紫のきりしまりンドウ・純白のうめばち草・木の実でつるうめもどき・ガマズミ等その中で、私が一番好きな花は鳥兜です。
ひとくちに鳥兜といいますが歴史的にもずいぶん古い時代からあつたようです。但しどんな時代でも鳥兜というと猛毒・殺人・事件がついてまわっています。

鳥兜はキンポウゲ科トリカブト属の総称です。トリカブトの仲間には日本には30種自生しています。花の色は紫色の他、白・黄色・ピンク色などあるそうですが、私は白は見たことがありますが、黄色・ピンクは見たことはありません。比較的湿気の多い場所を好むようです。

トリカブトの名の由来は、花の形が古来の衣装の鳥兜・鳥帽子に似ているからとも鶏のとさかに似ているからとも言われています。

イギリスではモンクフードと呼ばれ、(僧のかぶりもの)の意味だそうです。主な毒の成分は根にあり、ジテルペン系アルカロイドのアコニチンです。医学のことは全然わかりませんが、毒うつぎ・毒セリと並んで日本3大有毒植物の一つです。球根を乾燥させたものは、漢方薬や毒として用いられるが、漢方薬に使う時は(うず)または(ぶし)と呼ばれ、毒に使う時は(ぶす)というそうです。女性が二人もいるのに大変失礼ですが、(ぶす)の言葉の由来は鳥兜を飲まされ神経障害がおき、顔の表情がおかしくなったからとの説もあるそうです。

蝦夷トリカブトは、アイヌが弓矢のヤジリにトリカブトの球根を塗りつぶし動物を射止めたそうです。矢にぬる毒は古くからあり、古事記や日本書紀にもでてきます。神武天皇の兄イツセノミコトや、ヤマトタケルノミコトがこの毒にやられたと記されています。また、四谷怪談でお岩さんが飲まされた毒は、トリカブトとされています。韓国ドラマ・チャングムの誓いの第1話、第2話にブジャタンとしてトリカブトが登場しています。

事件では保険殺人事件・神谷つとむが沖縄で妻をトリカブトで殺害したのが話題になりました。4つの保険会社に総額1億8500万・1ヶ月の掛け金が18万5500円、2度目の奥さんが亡くなった2ヶ月後に再婚しすぐ自分を受

取人にした保険に入れ、その2ヶ月後に3度目の奥さんが死ぬという怖い事件でした。現在無期懲役で服役中です。

トリカブトとはじめて出会う、花の美しさに魅せられ一鉢500円で買って、花が咲く頃毎日毎日眺めていたら枯れてしまいました。なんで?

トリカブトの花言葉は「人間ざらい」でした。



❖ 幹事報告

久保田 知子 幹事



1)12月18日の最終例会である忘年家族例会と1月の新年例会のスケジュールが承認されましたので、後日ポストに入れさせていただきます。

2)交換留学生にクラブ1人年間2000円の補助をするという事になりましたので、本会計より出させていただきます。

3)2名の方が入会承認されました。

❖ 出席報告

中野 明副会長

出席報告	会員数	出席	M.U	出席率
11月6日	48(44)	36	1	84.09%
10月30日	48(46)	40	2	93.48%
10月16日	48(46)	34	1	80.43%

【欠席者】 8名

石内 正彦、田代 博信、井上 寛、木村 啓滋、大川 誠、石橋 徹、一寸木 信雄、須藤 公司

【今回MU】 1名

井上 寛 (11/6 地区委員会)

【前回MU】 1名増

菊池 義雄 (11/2 足柄RC)

【前々回MU】 増加無し

❖ Table Flower

- カンガルーポー
- スプレーバラ
- スプレーカーネーション
- フロリダビューティー

カンガルーポーの花言葉は、「不思議」「驚き」「分別」

スプレーバラの花言葉は、「包容力」

スプレーカーネーションの花言葉は「集団美」「感動」



❖ 卓話

「明治35年の小田原大海嘯～高波の恐怖を伝える絵巻」

足柄史談会 会長 押田 洋二様



絵を通して仲間の助け合い、地域のふれあいが、いざという時にどう行動になっていったか、明治の35年の歴史の中でどんな地域の絆があったのかを見ながら、防災につなげて頂けたらと思います。

海嘯は満月、新月の高潮の時、2つ目は豪雨を伴う台風、3つ目は海岸の地形と海底状況。こういう悪条件が3つ重なった時に起きると言われており

ます。したがって地震による津波とは、質的に違うという所を頭に入れてもらいたいと思います。

明治35年の9月28日に到来した、大海嘯による被災状況はどうだったのかというと、この近辺の町村合同で計算しますと、死者60名、全壊の家屋は320と大変な被害を受けたとなっております。

この大海嘯の絵を福山金兵衛さんがきめ細かな描写で描いており、しかも解説文も付けております。昨年お孫さんにあたる方から、こういう宝物があるよと聞いて、お願いをして今日こうしてご披露できるような状況になりました。

松原の海岸淵にあった家は一波で崩れ、宗福寺の本堂は屋根が付いたまま中島の方に流され、吉祥院は川中に浸かったという状況を描いております。宗福寺の屋根の上から、波に流されている人を竹竿にて助けている描写を描いております。宗福寺の住職と石塚さんという方2人が、波に流されている人を15名助けたと言われております。

また波で流された船を中島まで泳いで行き、船を取り出して神社の中にいる人々を救出しました。このような救済活動を地域の仲間たちがやってくれているということに、頭が下がる思いであります。

小八幡は大変な被害であったそうで、家屋が50件全壊し、亡くなった人は30名に及んだと言われております。翌29日の小八幡では亡くなった方々の死体を収容する作業をしており、その光景を見て「様子は魚市場に魚を並べたようだ」と言っております。

28日の午後から、旧宮小路の富貴座と唐人町に医療班が出来、被災者の救援を営みました。被災した午後このような体制が取れたということに、地域コミュニティの良さが伺えることが出来ます。



この時に亡くなった人たちの追悼会が10月の28日に、山王原の海岸で行われました。そして第2巻では、地域の状況・概略が書かれております。水の高さを表現している部がありますが、真鶴では沖合で箱根山より盛り上がったと表現しております。東は大磯、大きな波は国府津、小八幡、山王に至り、西の方は吉浜まで影響を及ぼしたと記載しております。地域の支援の輪を感じる光景も描かれており、翌日の29日から救援隊が警察、消防各県から出動してくれている状況が描かれております。

この光景を現代に照らして、こういう状況がもし起きたら、はたして救援隊がスピーディーに対応してくれるのだろうかという心配がされるところです。救援物資がどこでどのように支給されたかということ、具体的には新玉町にありました善光寺と松原神社で、2回ずつ行いましたと掲載されております。金銭的には全壊1戸に10～50円、高い所で80円であったと記載されております。

今日では皆さんの署名と私たちの活動で実際に法制化されているのは全壊家屋1軒につき300万円給付出来るという制度になっております。支援の体制が金銭的な体制も確立されてきているという状況です。

新玉町の1丁目両側の復旧工事は、県の費用で明治42年の2月から始まり4月までかかりました。そして36年の春から夏にかけて、古新宿の防波堤を築きました。

最後にですが、こういった絵巻を通して、これからの自然災害に私たちはどう立ち向かうかということで、一番大事なものは自助と共助ではないでしょうか。

